年金の大改悪ねらう
負担増え、支給減る
厚生省が諮問　国民、厚生を統合

林厚生大臣は十一月二十八日、厚生年金と国民年金の一元化を求めた年金制度の改革案を、社会保険審議会と国民年金審議会（厚相の諮問機関）の双方に諮問した。この改革案は、現在八制度ある公的年金制度を統合する基礎となるもので、厚生省は年末までに両審議会の審議結論を得て、来年二月にも法案を国会に提出し、一九八六年四月から施行したいとしている。公的年金制度の改革は、いよいよ大詰めを迎えている。

厚生省は、公的年金を一九九五年までに統合するスケジュールをすでに明らかにしているが、その統合にあたって厚生・国民両年金を次のように改革するとしている。

① 国民年金を拡大し、全ての公的年金に共通した「基礎年金」に改める。したがってこれまで国民年金に加入していた自営業者と任意加入のサラリーマンの妻は、強制的に改革された新・国民年金に加入させる。

②、厚生年金加入者は、国民年金（基礎年金）と厚生年金（所得比例部分）の両方に加入する形となり、いわゆる二階建て年金といわれる制度となる。

この改革で、保険料は次のようになる。これまで国民年金に加入していた自営業者などは、一九八六年四月から月額六千八百円（来年度六千二百二十円）となる。一方、国民年金に任意加入しているサラリーマンの妻の保険料は夫の保険料に含まれることになる。ならびに、女子は現行の九・二%から一一・三%（同）に引き上げられる。また、女子の場合はさらに一九八六年以降、毎年〇・二%ずつ引き上げられることになっている。さらに、厚生年金の保険料率は二〇二〇年時点で、現在の三倍近い二八・九%にまで段階的に引き上げられる。

これによって現在賃金二十万円の男子労働者の負担保険料は一万六百円だが、八五年十月からの保険料改定で一万二千四百円となる。

新制度下で、年金給付はどうなるか。受給権を得るには、新・国民年金で二十五年、厚生年金で二十年の加入期間が必要であり、支給開始年齢は新・国民年金が六十五歳、厚生年金が六十歳となっている。支給額は、自営業者の場合、新・国民年金に四十年加入して月額五万円（一九八二年度価格）、夫婦で十万円。加入期間が短ければ、当然減額される。

厚生年金は、四十年加入で夫婦合わせた一世帯あたりの年金支給額は、現役労働者の平均賃金の六八・九%にとどめ、約十七万六千円（八二年度価格）前後となる。内訳は、夫の年金が厚生年金（所得比例部分）と基礎年金で十二万六千円、妻の基礎年金が五万円だ。

現行の制度では、妻の国民年金、夫が厚生年金に四十年加入すると妻の年金は七万五千円、夫の年金も十七万円（八二年三月の男子標準報酬で試算）となるはずだが、改定されると約七万円の減となる。

さらに、女子の厚生年金支給開始年齢を現行の五十五歳から六十歳に段階的に引き上げることになっている。

炭労では第三種の特例を含めた改悪阻止のために、全力をあげてたたかうことにしている。

お、サラリーマンの妻の任意加入期間は、新・国民年金に加入していたものとみなされる。

厚生年金の保険料率は、一九八五年十月から、男子は現行の一〇・六%から一二・四%（労使折半）

このままでは危い
四山鉱 ——出勤向上は
人員補充と作業環境改善で——

人員減で出炭増強をすすめる四山鉱

最近の四山鉱の職場では、労働者の生命より保安無視、生産第一の状況が各所に現われている。

六十添坑西五片では、マイトを放置したまま監視人を置いていなかったり、不発マイトが拾得されたりしている。

三十五坑関係では、依然として掘進のさいの施枠不十分のために発破で枠を倒している。また、エンドレス運搬による災害など、生命にかかわるような事故も起こっている。

全般的に腰痛症、熱中症もおおい。この状況は、払の進行が早いことで掘進切羽が増え、それにしたがって仕繰工の作業範囲がひろがっている。掘進を急ぐあまり、高温の現場を含む作業環境が悪化してきている。このことは会社が進める人員減のままでの合理化と決して無関係ではない。

会社は、出勤率の向上をしきりに強調し、最近では繰込場に日々の欠員者数を出すようになったが、果たして出勤向上の掛け声だけで問題の解決になるのだろうか。

毎年三池炭鉱全体で二百人近い定年退職者が出て、自然減員になっているにもかかわらず、四山鉱と有明鉱だけにわずかばかりの試用員を採用し補充しているに過ぎない。

試用員期間を過ぎると、主に掘進や三交替仕繰に配置しているが、常一番関係の仕繰や電気、機械などの人員不足は深刻である。

常一番の間接部門にも人員を補充して、作業環境を良くすることが、出勤の向上につながるものと思われる。（この項、一分会職場新聞『きずな』十二月八日発行、No.九十三号から）

災害・事故つづく

四山鉱では十月に重傷者三人を出していますが、十一月十五日、本層六十卸東三片払で枠修正中、エアーブロックの吊金具が切れて頭部にあたり重傷を負うという災害が起こっています。

また、三川鉱では十一月二十五日、追突による脱線事故がありましたが、幸い人災は免れました。

〈短信〉〝ベアより献金〟

経団連の稲山嘉寛会長は十一月二十九日の記者会見で、「来春の賃上げはしない方がよい」と、再びベア・ゼロの賃金凍結を主張した。

稲山会長は、今春の賃上げでもベア・ゼロ論を展開したが、経営者側を代表して再び賃上げ抑制にのりだしたものだ。来春闘に向けて、労働側は今春闘より一%低い「六%以上」を統一要求基準にしているが、稲山発言はいっそうの抑制ムードを作ろうとしたもの。他方、稲山会長は「物価も上がり、選挙費用もかかる」として企業の政治献金の規制ワクを拡大するよう主張、賃上げは抑え、自民党への政治献金は増やすという財界の立場を露骨に示した。〔連合〕

時の話題
総選挙 問われる倫理
あざ笑う者の勝算と誤算

総選挙はいよいよ終盤戦。今度の選挙ほど、主権者の政治水準が試される選挙はない。田中問題を軸にした政治倫理で、自民党と田中軍団が世論をあざ笑い続けるか、それが誤算となるか……。

役者そろえて解散
田中軍団　だが胸中に不安が

紫のふくさ。中に、天皇による解散詔書が包まれている。ささげ持って入ってきたのは後藤田官房長官。田中派の幹部で、中曽根内閣に送りこまれた田中の懐刀である。ふくさは衆院事務総長を経て、福田一衆院議長に手渡された。

福田氏は、法相当時の一九七七年、この同じ衆院本会議の場で、戒告決議を受けた。ロッキード灰色高官の指名が出たのは「雑音によるものだ」と述べ、国会の真相糾明を侮辱したためだった。

その福田議長が、「衆院を解散する」と、詔書を読みあげた。十一月二十八日、午後三時三十五分だった。

その瞬間、二つの決議案の廃案が決まった。二月九日の全野党共同提出以来、日本の政治の暗部をつきさし、田中にはのどにひっかかった骨となっていた田中角栄辞職勧告決議案。さらにそれ以前から本人はもとより、本人のボス・中曽根首相にとっても目の上のコブになっていたはずの中曽根派・佐藤孝行議員の辞職勧告決議案。いずれも、ロッキード裁判第一審判決で有罪の判決が下された議員である。

そして次の瞬間、「バンザイ」の声が議場をおおった。中曽根首相は顔に笑みを浮かべていた。解散詔書をもってきた者、それを読みあげ解散を宣言した者、そしてぼくを笑んだ者、役者はそろった。

同日の田中派の総会。「いよいよ最後だ、がんばってほしい」。江崎真澄会長代理が、立候補する軍団の一人ひとりに平均一千万円が入った分厚い封筒を手渡す。渡部恒三事務局長が「今度の選挙さえ突破すれば、怖いものはなくなる」と檄をとばした。選挙に勝ちさえすれば、田中問題はあとかたもなくなり、怖いものはなくなる。とにかく勝つことだ……が、自民党・田中軍団の候補者の胸の別のころには、世論をあざ笑い過ぎた不安がかげっているに違いない。

やはりこわい倫理
76年選挙　今生きる教訓

そのとき、田中の顔色はさえなかった。中曽根氏は、それ以上に色をなくしていた。

刻々伝えられる開票速報。最終的に、田中派は選挙前の四十六議席が四十二に減った。ロッキード事件で、右翼の児玉誉士夫との関係で名前が出た中曽根氏は、前回の第二位から三万七千票余りを失い、わずか五万六千票の最下位当選となった。

一九七六年、田中逮捕の年の十二月五日に行なわれた第三十四回総選挙。「ロッキード事件は票にならない」といわれたが、フタをあけてみれば、やはりロッキード事件が響いた選挙であった。自民党は全体で、二百七十一議席を二十二議席も下まわる惨敗となった。得票率もほぼ五%ダウンした。

確かにこの選挙では、自民党から分離した新自由クラブがブームを起こしたことが影響した。しかし、政治倫理は票にならないという一部の見方は成立しなかった。

今回も「政治倫理なんてのは選挙で争点にならない」（田中派・山下元利氏）という。が、果たして有権者全部がその判断を表に現わさなくてもよい。

全百三十選挙区のうち、激戦区は百余区。うち約五十選挙区が、自民党と野党が最後の一、二議席を争う対決区で、ここでわずかの票が動けば、ナダレ現象がおきるのである。

「この程度の国民にはこの程度の政治」と秦野法相はいった。しかし、有権者をあざ笑う者が勝つか、それが大きな誤算を引き出すか……。七六年のロッキード選挙はその最初の回答だったが、今回の回答は主権者たる国民の審判にかかっている。